Michinori Farm

松井洋子さん 松井俊憲さん

うきは市／就農1年目

前職は、福岡市内で革の鞄や靴の修理の仕事を行っていた俊憲さん。それまで農業の経験はありませんでしたが、うきは市で農業を行っていた妻の洋子さんの父が病のために農作業ができなくなり、俊憲さんが引き継ぐことに。

洋子さんの父は農薬を使用しないで水稲を栽培していたことから、俊憲さんもそのような農業を学びたいと考え、インターネットで情報収集。そこでAGSAの存在を知りました。８期生として学びながら、AGSA１期生の生産者より実技を研鑽。2023年、洋子さんの実家のそばに住居を構え、洋子さんとともに就農。就農に際し、新規就農に関する国の支援策を利用。

俊憲さんとともに就農した洋子さん。今まで、父の農作業を手伝うことはほとんどなかったものの、自分が就農することに抵抗はありませんでした。洋子さんは、父が後継者のいないことを寂しく思っていたのを知っていたので、俊憲さんが就農の決断をしたことをうれしく思ったそうです。

なお、農園名の「Michinori」は「道のり」。これから学び、経験を積んで、おいしいお米や野菜が作れるよう目指していくという松井さん夫婦の思いが込められています。

Michinori Farm

栽培品目：野菜（露地）、水稲（専ら自家用）
経営面積：約115a（野菜95a、水稲20a）
販路（野菜）：JA出荷、直売所

Instagram
https://www.instagram.com/michinorifarm?igsh=YmF0dGlwNWExamw2

有機栽培の実践

就農１年目は、なす、さつまいも、ほうれんそう、オクラ、たまねぎ、水稲（自家用）を栽培。BLOF理論に基づき、堆肥（有機質資材）の施用と太陽熱養生処理による物理性・生物性の改善、堆肥と有機肥料によるアミノ酸の補給、土壌分析・施肥設計に基づくミネラルの補給を実践。また、水田での栽培のため、排水対策として明渠を施工。風で傷つき、商品価値が下がることが多いなすの風よけと害虫対策として、ほ場の境界にはソルゴーやスーダングラスを植栽。ソルゴーは緑肥としても利用しました。

また、畑の畝には、コンパニオンプランツとしてマリーゴールドも植栽しました。

さらに、俊憲さんは、研修では経験していない、なすの栽培のため、JAの部会に加入。選定や管理技術を学びながら、自らのほ場で実践しました。

なすを栽培中の圃場。ほ場境界にスーダングラス（写真左）を植栽しています。

経営面の取組・工夫

農場は、基本、夫婦で管理。就農時にはハウスがなかったことから、露地栽培できる品目を栽培。夏の果菜類には、夫婦で１日にできる作業量を考慮し、２日に１回程度の収穫で済むなすを選択しました。

野菜の生産に必要な機械は、国の支援策を活用し、自己負担を抑えて導入。

生産した野菜について、JAのなす部会員である俊憲さんは、なすの規格品をJA出荷。規格外品のなす、さつまいもとほうれんそうは、道の駅等の直売所や小売店の直売コーナーで販売。さつまいもはSNSを通じても販売しています。

直売所等に訪れる方など、より多くの方にMichinori Farmを知ってもらえるよう、ロゴマークも作成しました。

収穫したなすとロゴマーク
ロゴマークには、「Michinori Farmの野菜でほっこりしてもらいたい」という思いが込められています。

（写真はMichinori Farm提供）

今後の展開

技術の面では、１年で土壌の物理性が格段に良くなるはずはなく、その伸び代はあると考える俊憲さんは、AGSAで学んだBLOF理論に長期のスパンで取り組む方針です。

経営の面では、昨年に就農したばかりであり、毎日の作業に追われる日々であったものの、松井さん夫婦は「経験を積み、課題、改善点を明確にして、長期的に充実した農業、生活が送れるようにしたい」「農作業は１年２作～３作と考え、そのうち例えば時間を作り、福岡市内で自分で生産したさつまいもを販売してまわりたい。」「ロゴマークを見ればMichinori Farmだと認知していただけるよう努力していきたい」と考えています。

そして、「農業未経験からMichinori Farmがあるのは多くの人の支えがあったから」と語る俊憲さん。Michinori Farmは、BLOF理論に継続して取り組み、成果をあげるとともに、労働環境の改善、商品の価値に見合う販路の確立を実現させて、有機農業を目指す方々にとってのモデルになれるよう精進していきます。

もっと聞いてみました！

Q. 土づくりに必要な資材の調達は？

A. 就農当初は、JAや資材メーカーから市販の堆肥や有機肥料、ミネラルを調達していました。現在はそれに加え、うきは市内で入手できる家畜ふん、もみ殻、米ぬかを自然循環させて活用しており、AGSAで学んだBLOF理論を基に土づくりを行っています。

収穫したさつまいも

たまねぎのほ場で肥料散布作業

Q. 就農1年目の野菜の出来栄えは？

A. 就農１年目は土づくりの重要性を痛感した年でした。全作共通して、目標とする出荷量には届きませんでしたが、美味しいと多くの方からお声をかけていただきました。

今後も継続してしっかり土づくりを行い、安定した品質、収量を目指していきたいです。

Q. 地域農業の一翼を担うようになった今、思うことは？

A. 私が就農した地域では、農地を管理できなくなってくる方が増えている実感があります。こうした状況だからこそ、自分にはこれからチャンスがあると考えています。地域で認められるよう、これからもしっかりやっていきたいです。

生育中のほうれんそう

（写真はMichinori Farm提供）